枕詞の語彙論的研究

A Study of the old Japanese vocabulary—Makurakotoba

堀　　勝博
Katsuhiro Hori

枕詞は、日本古典、ことには古代和歌の修辞に用いられた語彙の一種であるが、上代において、すでに古語となっていたものが多く、また用例が少ないこともあって、その真義をつまびらかにすることはきわめて困難である。

本研究は、語彙論的方法により、古辞書をはじめ、和漢の本草書や類書、また地理関係の文献等にひろくあたり、万葉集をはじめとする枕詞の用字・用法を検討し、語構成・語源を考証して、その原義を明らかにすることを目的とする。

この３年間、角川書店新編国歌大観 CD-ROM 版その他の図書・資料により、枕詞の諸用例にあたるとともに、無窮会図書館や東洋文庫所蔵の古典籍をいくつか調査した。これらの資料や調査結果をもとに、本研究を今後とも発展させていきたい。

報告者がこの３年間に発表した論文は、次の三点である。

1　枕詞「水茎の」について
　（くろしお出版単行書『日本語の地平線』平成 11 年 12 月）

2　「堅香子」考
　（無窮會編「東洋文化」復刊 88 号、平成 14 年３月）

3　橘の歌
　（和泉書院単行書『セミナー万葉の歌人と作品』９　近刊）

このうち、枕詞そのものをテーマとしてとりあげたのは、１の論文である。「岡」にかかる枕詞「水茎の」は、その語義・冠繋が不詳であったが、報告者は、諸文献・諸用例を検討し、その由来について考察した。その結論を要約すると、「をか」という和語が元来水の湧出する水源という意味をもち、枕詞「水茎の」も「水くく場所としての岡」という原義であったということである。「くく」は、湧出・漏出の義の動詞である。万葉集など、上代の文献において、「岡」は、温泉や黄泉などにちなんで用いられた例が多い。また、大伴旅人歌に見える「水茎(みづくき)の水城(みづき)」は、被枕を異にする例であるが、これは「水漬(みづ)く城(き)の水城」が本義で、枕詞の表記は宛字であったと考えられるが、あるいは、太宰府に置かれた「漏刻」の「水漏(く)く」義にちなみ、「水くき、すなわち漏刻で有名な水城」という陪義を含んでいた可能性もある。また、関連して、平安朝に入り、「水茎」が筆の義をもつようになった理由についても、新説を展開した。

２の論文は、大伴家持「堅香子」歌一首の解釈を論じたものであり、枕詞を直接とり扱ったものではないが、論中に枕詞「もののふの」について少しく言及している。

３は依頼原稿であり、大伴家持長歌「橘歌」についてまとめたものである。